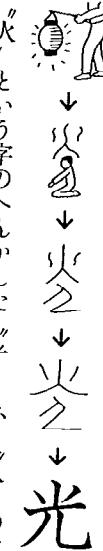


# 光

三年  
画数 6  
筆順 一 ツ ッ 光  
ワン ひかり・ひかる

成り立ち



「火」という字のへんかした「火」と、人」のすがたをあらわした「儿」とを組み合わせてつくった字で、「人が火であたりを“てらす”こと」をあらわしたもので

す。  
“てらす”といういみの字ですから、「かがやく」とか“ひかる”といういみにもつかわれます。

# 老

二年	画数 6
筆順	+ パ 老考
オノ	コウ
ウン	かんがえる

成り立ち



との字は、「老」(年よりのこと)と「巧み」(じようずなこと)のいみの「手」とを組み合わせてつくった字でした。〔参照「老(年より)」〕

「老人」(年より)はからだがおとろえて、なんでもうまくできなくなりますが、ただ「かんがえ」だけは、年のこうでわかいものよりも「巧み」です。それで、年よりの巧みな「かんがえ」ということばをあらわしたものです。

## 使い方

△さんすうのもんだいをとくとき、あわててこたえをまちがえてしましました。先生が「よく考えてから、ゆっくりいさんするんだよ」とおつしやいました。

△ぼくは、いろいろなことを考えます。「あるいは、どうやつてえさをみつけるんだろう」「犬はうれしいときには、しつぽをふるのに、ねこがしつぽをふるのは、おこったときや、えものをねらうときだ。どうして犬とねこでは、ちがうんだろう」などです。いろいろと考えるのはたのしいものです。

## 熟語例

△思考(「考え方」の、すこしむずかしい、いいかたです。「思考することは、たいせつなことである」などといいます。)

△熟考(よくよく、考えること。「熟考のすえ、けつろんを下した」などといいます。)

△愚考(愚かな考え。おもに、じぶんの考えのことを、けんそんしていうときに、つかいます。あらためつけいかたです。「そんなことは、なさるべきではないと、愚考いたします」などといふうです。)

## 使い方

△北国(きほくこく)は、日の出ている時間がすくないばかりか、日の光がよわいので、よく日光浴をしている光景を見かけます。

## 熟語例

△日光(ひのひかり) 太陽が出す光線(せん)

△日光浴(ひのひかりゆ) 太陽を浴びること。けんこうのもくときではだかになつて太陽の光線をからだに浴びること。)

△光線(こうせん) (『光の線』)といういみのことば。光は直線をえがいてすすむので「光線」といいます。『光』のことです。)

△光景(こうけい) (『光るようならつくしい景色』)といういみのことがですが、たんに「目にうつるようす」のいみにつかれます。)

△光陰矢(こういんや) の如し (光陰は「月日」の光のことですが、月日、つまり「とき」のいみです。「とき」のたつのは矢のようにはやいものだ」といういみをあらわしたことはばです。)

△光榮(こうえい) (光りかがやくような栄誉。たいへんな名譽のことです。)